

湖南 県域
Kさん



リレー メッセージ

県立 ST のよま話
06

S T の仕事に悩んで 少しだけ楽しんで いる方へ

初めまして。私は、回復期病院で働く5年目のSTです。主に脳血管疾患の患者さんに対し、高次脳機能障害、失語症、構音障害、嚥下障害等のリハビリを行っています。今回リレーメッセージの機会をいただき、何を書こうか随分悩んだのですが、せっかくの機会なので、自分自身のことを書けたらと思います。STという仕事が気になっている方や、同じような悩みを抱えているSTさんの励みになるかはわかりませんが、こんな人もいるんだなあ、こんな考え方もあるんだなあ、と知ってもらえたらと思います。

当たり前のことですが、STというのはコミュニケーションを武器とする仕事です。ところがどこか、私はコミュニケーションが不得手です。子供の頃から内気な性格で、友達も多い方ではなく、集団に馴染むのも苦手でした。そのうえ、ぐうたらで、隙あらばゴロゴロしていたような人間です。STを目指して大学へ入った後も、できることなら働きたくないと思っていました。学生時代から、様々なことを「しんどい」「憂鬱だ」と感じがちで、社会人になっただけで、しんどいんだろなあ、と考えていました。

STになりたいけど働きたくない、というのが致命的です。STは資格であり、職業で、働かざるものはSTになり得ません。「このままやったら、国試に受かっても資格持ちのニートになるんちゃうか」と親にすら言われた私に、大学時代の恩師がくれた言葉があります。「これまでしんどかったと思うけど、臨床に出て患者さんと向き合えばじめるよ、自分のことを考えなくて済むから、意外と長く続けよう」と

「働くというよりも、目の前の患者さんが困っている、何とかしてあげたい、良くしたいと思って頑張る日々が続くだけ。ついでにお金がもらえると思えばいいのよ」

恩師の言葉を聞いて、漠然とした「いやだなあ」という感情が無くなり、働くことを前向きに考えられるようになった気がします。その後、私は無事重い腰を上げて就活をして内定を頂き、国試に合格し、STになることができました。

リハビリの対象となる患者さんは、病気をきっかけに本来の日常生活から切り離されてしまった方々です。入院生活そのものにも多かれ少なかれストレスを感じているうえに、様々な後遺症を抱え、それに困っていたり、あるいは困るということに気づいていない方もいます。臨床の中では上手くないことの方が多いかもしれませんが、恩師の言うように、目の前の患者さんを何とかしたい、良くしたい、と思っていこうちに、なんと、5年近くが経ってしまいました。まだまだ新人に毛が生えたような未熟者で、先輩や同僚に助けられてばかりですが、向いていないし、きつと長続きしないと思っていた私にとって、5年目を迎えたというだけでも、自分の想像を超えています。

この先も超えていきたいと思っています。

最後になりますが、私はSTが好きです。働くことは今でもそんなに好きではありませんが、この仕事だからこそ、なんとか働き続けられていってると思います。今でも自分のことをSTに向いているタイプだとは思いませんが、STという仕事を魅力的に感じた人なら誰でも、この仕事にやりがいを見つけて続けていく底力があるのではないかと、と思えるようになりました。

STという仕事になるけれど、自分には向いていないかもと思っている人や、STとして働き始めたけど何かしんどいなあと感じている人が、これを読んで、「なんかかなりそう」と思ったら、この道を進んでくれたら嬉しいです。拙い文章を最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

